

混合クラスにおけるコミュニケーションの授業一年

高岸 美代子

はじめに

平成二十二年に改定された高等学校学習指導要領国語科では、改定の経緯として「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイディアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。」と述べ、国際社会に目を向けた内容になっている。実際、学校現場にも一九八〇年以降、中国帰国者や日系人などニューカマーの子どもたちが急増し、外国人児童生徒の教育問題が学校教育上大きな問題となっている。当然、彼らにとって言葉の問題は大きいですが、それ以上に日本人生徒とのコミュニケーションがうまくいかない等の悩みを抱えている。また、それは、外国人生徒と日本人生徒との間だけでなく、昨今はコミュニケーションツールの発達によって、日本人

生徒同士の間でもコミュニケーションに困難を来している実態がある。学習指導要領では、「伝え合う力」と表示され、言語の教育としての立場に立つ国語科として、国際化、情報化など、変化の激しい現代社会で、一人一人が良好な人間関係づくりや健全な社会づくりに積極的にかかわろうとする意欲や態度を育成することの必要性を述べている。

ところが、高等学校の国語科の授業の中で会話教育が取り立てて実践される機会は少ない。実際、国語教室ではスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、話し合い等公的な場面でいかに自分の考えを伝えるかという、表現能力の養成に重点がおかれている。が、船津（2007）では、最近のコミュニケーションの在り方、その変化に関して①言葉中心から言葉以外のメディアによるコミュニケーションへ②受信中心から発信中心のコミュニケーションへ③手段的から自己目的のコミュニケーションへという流れになっていると言及している。このように、対面会話の機会が減少し、一方通行になりがちな日常会話を考える時、公的な場面以前に、私的な場面でのコミュニケーションに困難をきたしている昨今においては、双

方向に重点をおいた会話教育が必要ではないかと考える。国語教室
の中での日常会話を想定した対面会話能力の育成が求められている
と考える。

そこで本授業は高等学校の日本人生徒と外国人生徒の混合クラス
で一年間を通して、国語の授業の中で、生徒同士の対面会話能力の
育成を図り、日常生活におけるコミュニケーションについて考えさ
せる授業として実践したものである。

1 授業の目的

日常の学校生活の中で、日本人生徒と外国人生徒、あるいは日本
人生徒同士が円滑なコミュニケーションができるよう、授業を通し
て互いの理解を深め、日頃のコミュニケーションのあり方について
考えさせる。

2 年間シラバス

目的に従って、1年間を3学期に分けて、体系的、組織的に年間
計画を作成した。

1学期 友人紹介スピーチ

2学期 談話分析レポート

3学期 コミュニケーションについてのアンケートの作成とレポー
ト

3 対象生徒と実施科目

・実施科目

学校設定科目「国語演習」3単位の内、本授業は2単位で実施。
「国語演習」のねらいは、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能を
伸ばして、総合的な国語力を育成することにある。そのため、本授
業では、インタビューやプレゼンテーション、話し合い、アンケー
トやレポート作成を通して、「話す」「聞く」「書く」の3技能を、他
の1単位は、評論教材、文学教材を選定して、読解力の育成を目的
とした。

・対象生徒

高校2年生 普通科 2クラス

Aクラス 43名(女子24名) 男子19名

*内 外国人生徒 5名(女子4名) 男子1名

Bクラス 43名(女子24名) 男子19名

*内 外国人生徒 5名(女子3名) 男子2名

対象校では、外国人生徒は、1年次は日本人生徒とは別クラスで
16時間の日本語の授業を受け、2年次になって、文系理系に分かれ
て日本人生徒と同じクラスになる。従って、本授業は、混合クラス
になって間もない時期から実施されたことになる。

4 授業の実際

(1) 友人紹介スピーチ

①目的

・ 外国人生徒と日本人生徒、日本人生徒同士の交流が図りやすい
国語教室づくりと互いの理解を深めることによって、日常生活
における円滑な人間関係づくりを目的とする。

・ インタビュー、作文、プレゼンテーションを通して、コミュニ
ケーション力、書く力、人前で発表する力を養成する。

②授業の概要

1 時間目 本授業全体の目的・構成・方法の説明を聞いて、「友人
紹介」の実例を2種類読んで感想を述べる。↓実例を
比較して、印象的な友人紹介は、その人となりが一
ピソード等を通じて如実に浮かび上がるものである
ことを認識させる。

2 時間目 インタビューの項目を考える。↓印象的な友人紹介に
するための項目を思いつく限り個条書きして提出させ
点検し、返却する。

3 時間目 インタビューメモを作成後、インタビュー実施↓列挙
した項目の中から2点に焦点をあてて、エピソードま
で聞き出すよう指示した。

4 時間目 1分用(400字)スピーチ原稿を書く

5 時間目 「友人紹介」実施↓紹介する者、される者2人前に出て、

互いに紹介し合う。発表に際し、スピーチ原稿は教師
に提出し、メモのみ持参するよう指示。

6 時間目 「友人紹介」実施後、評価表に記入↓印象に残っている
紹介5名を選んで投票

7 時間目 評価表の結果発表

印象に残った紹介とその理由を考える↓投票結果の多
いもの5名を選んで、選ばれた理由を話し合う。

③振り返り

1. 偶然が決め手の紹介する者、される者

敢えて親しい友人同士ではなく、座席の前後の者同士にした
ことにより、日頃話したことのないという生徒同士がペアに
なった。そのため、男女、日本人生徒と外国人生徒の組み合わ
せが出現した。

日本人生徒と外国人生徒のペアでは、外国人生徒が韓日辞書
をもつて対応している場面も見られた。彼らの真面目さは日本
人生徒にも伝わったように思う。

2. 理解を深めるインタビュー

印象的な友人紹介にするには、インタビューの内容と方法に
工夫が必要である。そのため、生徒には、ありきたりのものに
ならないよう、「学校生活以外でやっていること」「休みの日の
過ごし方」「兄弟との関係」「中学校時代に夢中になっていたこ
と」「小遣いで買っているもの」「10年後の姿」等質問内容を吟
味した後、2点に絞って深めさせた。その結果、クラスの中で
は、目立たない男子生徒が妹のお弁当を毎日作ってあげている

等、思いがけないエピソードを聞くことができた。また、外国人生徒の寮生活や文化の違い等を感じさせるエピソード等の発表には興味深いものがあり、互いの理解が深まったと感じた。

3. 印象に残る発表

紹介者の発表の手順も結果に影響することが指摘された。「○さんには、この中のだれも知らない秘密がありました。」とか聞きたくなるような前置きがあると印象に残る紹介になることが指摘された。発表順はスピーチ原稿のしっかりした者から順にした。外国人生徒の日本語での発表も新鮮にうつつたようであった。中には、日本人生徒を感じさせるようなしつかりした発表もあり、日本人生徒にとってもよい刺激になった。

(2) 談話分析レポート

①目的

・日本語会話の実質的でない発話¹に関する気づきを促すことによつて、外国人生徒と日本人生徒、日本人生徒同士の日常的なコミュニケーションを促進する。

・日本語教育で実践されている談話分析という手法を通して、分析力、レポート作成力を養う。

②授業の構成

I 導入(1、2時間目) コミュニケーションについて考える。

II 談話分析の実施(3、6時間目) 会話データ、談話分析表の説明、作成

III レポート作成(7、10時間目) 談話分析表の分析考察方法の説明、

明、テーマと仮説、レポートの書き方指導・レポート作成

IV 授業の振り返り(11時間目) アンケートと優秀作品発表

③授業の概要

1時間目 コミュニケーションについて考える

談話分析の授業の事前学習として、教科書中の2文を²読解して、次の視点からコミュニケーションについて考えさせた。

- ①聞き手の役割と非言語コミュニケーションの重要性
- ②若者言葉の特徴と若者のコミュニケーションの問題点

2時間目 要約文の作成

前の時間に皆で考えたことを確認し、自分の言葉でまとめる作業。1時間目の読解教材中のキーワードを使って400字で要約する課題を課した。

3時間目 会話データの配布

A・B・Cの3種類の会話データを配布し、記号の説明を行う。

4時間目 談話分析表の配布

談話分析表(表2-1、2-2)を2枚配布し、表中の項目の説明を行う。

5時間目 談話分析表の記入例

会話データAを見ながら、談話分析表の空欄を埋める作業。談話分析表(1)では、会話データAの読み合わせをしながら、話題の転換点を全員で確認し、統一

表1 会話データA

| | | |
|-----|---|---|
| 132 | I | う::ん 台湾はすごい なんか あのうありがたいことに親日の人が(h) |
| 133 | M | 多いですね |
| 134 | I | 多いですね 日本の文化もすごいはいってますね |
| 135 | M | ふ::ん そうなんだ (3) えっ それまでも何回か中国にはいったことあったんですか？ |
| 136 | I | 小学校の三年生(h)の時に1回家[族で行ったんですけど |
| 137 | M | [ふ:ん |
| 138 | I | それ以来です |
| 139 | M | あ じゃあ 今回2回目 |
| 140 | I | そうです はい |
| 141 | M | 食物とか なんか 中華ってちょっと脂っこ[いって感じですけど |
| 142 | I | [あ: |
| 143 | M | 好きですか↑中華料理 |
| 144 | I | う::んと(.) 結構中国の中でもこう料理が結構からすごい辛い 四川料理とか |
| 145 | M | うんうんうんうん |
| 146 | I | 東北地方のは結構あっさりしてたりするんですけど |
| 147 | M | あっそうなんですか |
| 148 | I | はい 私もなんかあんまり油たくさん使ったものをずっと食べていると |
| 149 | M | うん |
| 150 | I | あんまり好きじゃなくて |
| 151 | M | ううん |
| 152 | I | でもあっさりしたものとかはわりと好きです |
| 153 | M | うんうんうんうん そうなんだ へえ 楽しみです |
| 154 | I | そうですね |
| 155 | M | ふだん 趣味とか何かないですか？ |
| 156 | I | 趣味ですか？ 趣味は結構あのう美術館に行ったりとかあのう仏像(h)見たりとか |
| 157 | M | へえ: |
| 158 | I | hhh |
| 159 | M | いいですね |
| 160 | I | hhhh |
| 161 | M | なにか芸術的な |
| 162 | I | hhhh |
| 163 | M | じゃあ 美術館めぐりとか結構します？ |
| 164 | I | お休みの日で時間がある時とかはし[ます |

表 2-1 談話分析表 (1)

| | A | B | C |
|------------------------------------|----------------|----------------|----------------|
| 属性 (日本人か外国人か) *Mは同一人物 | I () M () | Y () S () | R () M () |
| 話題数 (関連話題数) | | | |
| 話題開始部分と気付いた点 | | | |
| 話題終結部分と気付いた点 | | | |
| それぞれの話題の主な話し相手はどちらか (例) M→I→I→M | | | |

表 2-2 談話分析表 (2)

| 項目 | I | M | Y | S | R | M |
|----------------------------|---|---|---|---|---|---|
| 文末表現 (言い切り表現・言い差し表現・文末詞使用) | | | | | | |
| あいづち (あ系・うん系・そう系・はい系) | | | | | | |
| フィラーの使用 (なんか・あのう・えっと等) | | | | | | |
| その他 (笑い・繰り返し・口癖等) | | | | | | |
| その他、二人のやりとりの中で気づいたこと | | | | | | |

6時間目 || 談話分析表の記入と評価

した。談話分析表(2)では、各項目の用語の確認を行った後、使用頻度を数えて数字を該当箇所に記入させた。記入方法や数え方等は統一するよう指導した。

会話データB、Cに関しては、ペアワークでそれぞれの

データを読みながら、前の時間の授業の要領に従って、話題の転換点を考えさせ発表させた。その後、各自で談話分析表の残りの空欄に記入させ、回収。作業の量と質を4段階で評価した。

評価基準は次の通りである。①大変よくできている || 記入方法や内容に工夫が見られ、質量共に期待以上の完成度である②大体できている || 指示通りになされている。③不十分である || 質量共に完成度が低い④未完成

7時間目 || 分析考察方法の指導

レポート作成を前提にして、談話分析表をもとに、テーマ例の説明をしながら着眼点と分析考察の方法を指導した。①母語話者同士の場合 ②母語話者同士の場合と接触場面の場合 ③母語話者同士の場合と第三者接触場面の場合 ④接触場面の場合と第三者接触場面の場合 ⑤母語話者同士の場合と接触場面の場合と第三者接触場面の各項目を比較させながら、違いを考えさせた。例として、他の場面と比較して接触面に多い沈黙の理由をあいづちの視点から考えさせた。

Ⅱ 中間考査

考査問題として、会話データAから出題、5時間目を実施した談話分析表の記入を中心にした問題を作成した。ねらいは、①談話分析表の各項目の用語の理解 ②初対面の者同士の円滑なコミュニケーションのための工夫 ③「笑い」や「あいづち」等、実質的でない発話の会話における役割や機能を考えさせることにある。

8時間目Ⅱ テーマと動機、仮説の検討と評価

レポート作成の前段階として、会話資料中の自分が興味関心のある項目について、テーマを定め、仮説を考えさせた後、個別に点検し、評価した。評価の結果、仮説を導き出せないテーマに関しては、再考を指示した。

9時間目Ⅱ レポートの書き方指導

手順と2つの異なる方法を例示した参考資料を配布して説明した。

10時間目Ⅱ レポート作成と評価

次の基準で評価した。①大変よくできているⅡテーマに従って、仮説が説得力をもって検証され、独自性と探究心が発揮されている。②大体できているⅡ比較的結果が予想されやすいテーマで、無難にまとめられている。③不十分であるⅡ全体的に表面的な分析で、十分に検証がなされていないため説得力に欠ける、あるいは結論が唐突で論理性にかける。④未完成Ⅱ与えられた条件が満たされていない。

11時間目Ⅱ アンケートと優秀作品発表

優秀なレポートの中から日本人生徒8名、外国人生徒2名を選んで、発表させた後、本授業に關してのアンケートを実施した。

④ 振り返り

1. テーマに見る関心の高さ

日本人生徒、外国人生徒それぞれの選んだテーマは、次表のとおりである。日本人生徒11名が未提出であった。テーマの選択から関心の高さがわかる。日本人生徒に「笑い」が多かったのは、会話データ中の日本人に笑いが目立って多かったこと、分析例に「笑い」を取り上げたこと等によると思われる。

表3 テーマ一覧

| | テーマ | |
|------------|-----|---|
| 笑い | 19 | 0 |
| あいづち | 10 | 5 |
| 日本人と外国人の比較 | 10 | 0 |
| 文末表現 | 8 | 4 |
| フィラー | 6 | 0 |
| 実質的でない発話全般 | 6 | 0 |
| その他 | 5 | 1 |

2. 気づきを促す分析

11時間目を実施した事後アンケートの結果から、授業前から外国人生徒は、日本人生徒よりも実質的でない発話に関して意識していたことがわかった。意識していた日本人生徒が日本人生徒全体の26・4%であったのに対し、外国人生徒は外国人生徒全体の52・3%で、全項目について大切であると答えている。日本人生徒も90・5%の生徒が大切だと答えている。

また、「文末表現」に関する外国人生徒のレポートで、「日本人が使っている「文末表現」には、「て」や「けど」「と」等の「言いさし表現」が多い。自然な日本語会話で話すには、「言いさし表現」で話すことよいに気付いた。」というところまで言及していたものもあった。この発表では、日本人生徒が意識していなかったところに気づかされたという側面がある。

3. 大切な理由比較

大切に思う理由としては、後の表の通りである。大切に思う理由の全てに○をつけてもらう選択式にし、最も多かった選択肢を表に記す。

日本人生徒と外国人生徒はほぼ同じ結果が得られたが、最も多かった選択肢には多少の差異が見られた。概して、日本人生徒は、話し手の立場で考えているのに比して、外国人生徒は、聞き手の立場で考えていることがわかる。

また、あいづちや笑いに関しては、日本人生徒が会話を感じよく円滑にするためという雰囲気的な捉え方が多かったのに対し、外国人生徒は、あいづちや笑いで相手の反応を窺いながら

表4 実質的でない発話が大切だと思う理由

| 実質的でない発話 あいづち | | 大切だと思う理由 | | 外国人 | 日本人 |
|------------------|----|----------|------|---|-----|
| 発話途中の上昇イントネーション | 笑い | ファイラー | 文末表現 | 聞き手が興味を示しそうな話題、共通の話題を見つけるために必要だから。 | ○ |
| | | | | 話し手に共感を表すことにより、相手に安心感や親しみを感じさせることができるから。 | ○ |
| 発話途中の上昇イントネーション | 笑い | ファイラー | 文末表現 | 言い切られてしまうと、答えようがなく、会話が途切れてしまうから。 | ○ |
| | | | | 相手に問いかけることにより、話題が広がり、深まるから。 | ○ |
| 発話途中の上昇イントネーション | 笑い | ファイラー | 文末表現 | いきなり話し始められるよりも、聞き手にとって聞く構えができるから。 | ○ |
| | | | | 話し手にとって、話す内容を考える間になるから。 | ○ |
| 発話途中の上昇イントネーション | 笑い | ファイラー | 文末表現 | あいづちと同じ効果があり、聞き手の反応や態度は、話し手にとって気持ちよく話すのには重要だから。 | ○ |
| | | | | 同じ話題でも話し方によって、相手の反応が異なってくるから。 | ○ |

会話することの必要性を感じていることがわかる。

さらに、本授業を通して気がついたこととして、「日本人との会話が続きなことが心配でした。「あいづち」をしたら、話が盛り上がるのがわかりました。」とあり、今後こころがけたいこととして、「あいづち」の必要性に気付いたので会話の時にうまく使いたい。」(2名)「先取りあいづちを取り入れたい。」「文末表現」を考えながら、日本人と同じように自然な会話をしたい。」(3名)とあり、以上のことから、自然な日本語会話には「文末表現」、会話を盛り上げるには「あいづち」の使い方が鍵を握っていると考えていることがわかる。

4. 会話の文字化データの新鮮さ

会話は話す端から消えてしまうもので、文字に起こしてみる機会はあまりない。特に、笑いやフィラー、あいづち等会話の実質的な内容に関わりない部分はカットされることが多い。これらは、ほとんど無意識のうちに使用されているもので、本人ですら文字にしてはじめて気づく類のものである。本授業には、何気ない日常会話を読む面白さ、新鮮さがあり、日本人生徒、外国人生徒ともに興味を示していた。今回は大学生の初対面会話の文字化したものを使用した。今回は生徒自らの会話を録音して文字化したものを使用したい。日頃の自らの会話をモニターすることによって、より理解が深まることが考えられる。談話分析は国語の会話の授業に積極的に採用する価値があると思う。

(3) コミュニケーションについてのアンケートの作成とレポート

①目的

・LINEやブログ、ツイッター等、コミュニケーションツールの発達によって、対面での会話の機会が減少したことが、日常のコミュニケーションにどのように影響を与えているか、実態を調査し、分析することによって、コミュニケーションのあり方について考えさせる。

・アンケート項目を話し合い、集計して結果を分析考察するまでの手法を身につける

②授業の概要

1時間目＝準備学習

教科書中のアンケートについて読後、アンケートの目的、項目、対象、作成実施手順を説明。その後、アンケート項目を作成し、回収。

2時間目＝グループ学習

前の時間作成したアンケート項目について、4人1組で話し合った後、グループで代表作1種類提出する。

3時間目＝アンケート実施(3クラス 124名)

回収後、授業実践者が分野別にまとめる。

4時間目＝テーマ「SNSと対面コミュニケーション」について

アンケート結果の分析と考察

各分野に着目して、できるだけ焦点を絞り、アンケート結果を生かすため、数字を挙げて客観的に論理的に書くよう指導した。仮説検証の形で書くよう指導した。

5 次の内、あなたにとって対面でのコミュニケーションが苦手な全てに○をつけて下さい。

①異性() ②知らない人=年上の人() ③知らない人=年下の人()

④知らない人=高校生() ⑤外国人() ⑥誰とも話せる() ⑦その他 []

5-I ⑥以外に○をつけた人は、苦手な理由は何ですか。あてはまるもの全てに○をつけて下さい。

①咄嗟に話題が見つからず、何を話してよいかわからないから() ②相手の目が見られないから()

③話が続かなくなって、沈黙になると嫌だから()

④やりとりがうまくできなくて、お互いに気まずい雰囲気になるのがこわいから()

⑤どうやって話しかけてよいかわからないから() ⑥相手がどう思ったか気になるから()

⑦相手が目上の人の場合、敬語の使い方がよくわからないから() ⑧外国語が話せないから() ⑨相手が初対面の場合、人見知りするから() ⑩その他

⑤コミュニケーションツール

6 次のコミュニケーションツールの内、あなたが普段よく使用しているものを○をつけて下さい。

①スマートフォン() ②ケータイメール() ③パソコンメール()

④携帯電話() ④家の電話() ⑥その他 []

6-I 上記のツールを合わせて1日何回くらい使っていますか。(略)

6-II 上記のツール使用料金は1ヶ月どのくらいですか。(略)

6-III 上記のツールを用いて、誰と何人くらいコミュニケーションしていますか。

8-II(1) 7-Iで①の回答をした人は、その理由は何ですか。

②相手の反応を確かめながら話すことができる()

③相手とのやりとりの中で、新たな発見もあり、深められる()

③相談ごと等その場で早く解決する場合が多い() ④話した後すっきりする()

⑤誤解が生じにくい() ⑥その他 []

8-II(2) 7-Iで①以外の回答をした人は、その理由であてはまるもの全てに○をつけて下さい。

①いつでもどこでも話せるから便利で、相手にも時間の負担を書けない()

②お互い相手の顔を見ない方が、相手に気を使わずにすむので、本音の話ができる()

③直接会って話をすると、傷つけられるのではないかと、相手の反応がこわい() ④相手に時間をかけてじっくり考えてほしいから() ⑤自分の気持ちが整理しやすい() ⑥その他

9 日常会話の中で自分の考えや等出来事以外の自分自身に関する本音の話を主として誰に話しますか。

①誰にでも話す() ②話す人は決まっている()

③聞かれたら話す() ④性的悩みや恋人に関すること() ⑤世間話しかしない() ⑥その他 []

④実質的でない会話(略)

【コミュニケーションに関するアンケート】 (男 女)

自分にあてはまるものに○で答えて下さい。その他に○をした人は []の中に詳しく書いて下さい。

○生活

1 部活その他同好会、クラブ等に入っていますか。

1-I 入っている() ⇒ ①運動部() ②文化部() ③同好会()

④学校外のクラブチームに入っている() ⑤その他 []

II 入っていない()

1-I-1 1と答えた人は、週に何日活動していますか。(略)

1-I-II IIと答えた人は、放課後主に何をしていますか。(略)

○対面コミュニケーション

2 学校外で普段対面でもよく話をする人は誰ですか。

①家族() ②親戚の人() ③幼なじみ()

④小中学校時代の友達()

⑤同じ高校の友達() ⑥その他 []

3 家族の中で普段対面でもよく話をする人は誰ですか。

4 次の中で、会話を盛り上げるためにあなたが普段こちらがけていること全てに○をつけて下さい。

①よく笑って反応している() ②あいづちをうちながら聞いている()

③相手の話題に合わせて話している() ④自分から相手の興味をひくような面白い話をする()

⑤質問をして会話を発展させる() ⑥会話が途切れた時、自分から新しい話題を提供する()

⑦相手が話し始めるまで待っている() ⑧その他 []

①同じ学校の友達()人 ②中学校時代の友達()人 ③小学校時代の友達()人

④塾や習い事で知り合った友達()人 ⑤家族()人 ⑥知らない人()人 ⑦その他

6-IV 上記のツールの内、何の機能を使っていますか。使用しているものに全て○をつけ、特によく使っているものに◎をつけて下さい。

①LINE() ②メール() ③ゲーム()

④twitter() ⑤mixi() ⑥facebook() ⑦ブログ() ⑧チャット() ⑨スカイプ()

⑩ネット検索() ⑪アプリ()

6-V 4-IIIの③でゲームと答えた人は、1日何時間くらいゲームをしていますか。(略)

○コミュニケーション全般

7 コミュニケーションの手段として、日常生活の中で最もよく使用しているものは何ですか。

①対面() ②メール() ③LINE() ④電話 ⑤その他 []

7-I ①以外に○をつけた人は、その理由に全て○をつけて下さい。

①いつでもどこでも話せるから() ②会って話すより話しやすいから() ③暇だから() ④寂しいから() ⑤絵文字とか使えて楽しめるから() ⑥皆が使っているから() ⑦その他

7-II ①以外に○をつけた人は、主としてツールをいつ使用することが多いですか。

①朝() ②夜() ③休日() ④暇な時()

⑤いつでも() ⑥その他

8 大切な話は主として誰に話しますか。(略)

8-I 大切な話をする時は、主としてどういう手段を使用しますか。

①直接に会って話す() ②メール() ③LINE() ④電話() ⑤その他 []

5 時間目Ⅱレポート作成

③振り返り

1. アンケート項目のまとめ

本授業の目的がレポート作成の際のテーマに生かされるよう、アンケート項目を、生活・対面コミュニケーション・コミュニケーションツール・コミュニケーション全般の4分野にしてみました。レポート作成に関しては、前学期にすでに経験していることでもあり、本授業の目的が生かされたテーマが大半であった。

2. 各分野からみたレポート

生活分野とコミュニケーションツールの関係では、部活に入っている生徒と入っていない生徒の使用頻度の差が取り上げられていた。が、必ずしも部活組の生徒の方が使用頻度が少ないとは限らず、部活の仲間とのLINEが頻繁に行き来している実態から、コミュニケーションツールの使用によって逆に人間関係が狭くなっていることへの気付きも見られた。対面コミュニケーション分野では、会話の苦手な人に外国人や目上の人、知らない人があげられ、どのように話しかけてよいかわからないからという理由が多かったことに対して、日頃から親しい友人同士の会話に終始していることが苦手な人を多くしているのではないかといった考察もあった。コミュニケーションツールでは、LINEやブログ、ツイッター等、ブログ等のSNS使用者が35・0%で、中には一日百回以上、千人以上の相手との発信をしている者もいることから、多くの人に自ら発信

して反応を求めている反面、身近な人の反応を恐れている実態が考察されていた。あいづちやフィラー等の実質的でない発話に関しては、既習事項でもあり、コミュニケーションツールに依存しないで、日頃の対面会話で使い慣れておくことの必要性、特に人の話を聞く時のあいづちのタイミングが対面コミュニケーションを成功させるといったように先の学習が生かされていた。

5 授業を終えて

(1) 外国人生徒と日本人生徒との交流

それぞれの授業の中で、外国人生徒と日本人生徒のペアワークやグループワークを取り入れたため、話す機会が生まれ、日常生活でも自然に話せるようになったこと、文化祭等の行事では協力し合っ
て思い出に残る高校生活になったとのことである。このことから、授業での交流のきっかけ作りが学校生活をより豊かなものにする
ことがわかる。これは、外国人生徒と日本人生徒の間だけでなく、日
本人生徒同士の間での交流も広げることになった。コミュニケーション
ツールの発達によって人間関係が閉じこもりがちになっている若
者に、授業の中の言葉を使ったやりとりの機会は以前にも増して
必要になってきていると思う。

(2) コミュニケーションを考える授業とレポートの作成

コミュニケーションを図る授業はあっても、コミュニケーション

そのものを考えさせる授業はないように思う。人間関係を構築する上に生徒にとつては実は切実な問題であるにも関わらず、コミュニケーションツールの使用実態や実質的でない発話の役割、現代のコミュニケーションの問題点等考える機会を国語の授業で実施したことと意義があると考ええる。レポートを作成することによってより深められたと思う。

(3) 反省点

3学期のコミュニケーションについてのアンケートの作成とレポートがレポートで終わってしまったことである。レポート中に見られた多くの問題点、気づきを再度教室で取り上げて話し合うことによつて、さまざまな角度からより深められたのではないかと考える。外国人生徒と日本人生徒との話し合いまでもつていけなかったことが悔やまれる。

(4) 外国人生徒のその後

本授業を受けた外国人生徒で、現在日本の大学に進学した生徒は7人、そのうちの5人にアンケート調査を実施した。1年間のコミュニケーションの授業の中で最も印象に残った授業は、談話分析レポートで3名、友人紹介、コミュニケーションについてのアンケートはそれぞれ1名であった。高校で日本人生徒と授業を通じて親しくなったのは、友人紹介スピーチ、日本語教科書からは学べない日本語について日本人と共に学べたことが日本人との交流に役立ったのは談話分析レポートとコミュニケーションについてのアン

ケート、大学の授業で役立っているのは、レポート作成とプレゼンテーションということであった。授業の中で、日本人と話して通じることがわかったことが自信となったと述べられていた。大学では日本人に間違えられることが多く、日本語がまだよく話せない他の留学生に日本語の通訳をしているとのこと、日本人の友人も多くできて、充実した学生生活を送っているようである。

注

1 実質的でない会話

本稿では、杉戸(1987)を参考にして、なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含まない発話で、あいづち、笑い、文末表現上昇イントネーションを実質的でない発話と定義する。

2 使用教科書

教科書「高等学校 改定版 国語表現Ⅰ」第一学習社

読解教材「言葉のキャッチボール」斎藤美津子 pp. 32-37

「トカ弁―婉曲表現の現在」 俵 万智 pp. 122-126

3 会話データ

A 日本語母語場面(日本人同士) B 第三者接触場面(日本語を話す外国人と外国人) C 接触場面(日本人と外国人、Aの日本人と同一人物)

4 分析方法

「笑い」に関して、量的分析方法と質的分析方法の二つの異なる方法を例示。

5 アンケートのねらい(全員対象と外国人生徒のみ対象の2種類)

① 韓国人留学生、日本人生徒対象の事後アンケート

・ 実質的でない発話に関して、授業の前後でどれくらい意識の変わりが見られるか。

・ 実質的でない発話は日本語会話の中でどういう点が重要で、どのように使用され、コミュニケーションにどのように役立っているかを理解したか。

② 韓国人留学生対象の事後アンケート

・ 日本人生徒とのコミュニケーションは、授業後にどのように変わったか。

6 使用教科書

「高等学校 改定 国語表現Ⅰ」第一学習社 pp. 84-88

参考文献

杉戸清樹（1987）『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相―座談資料の分析―』三省堂 p. 83

中井陽子（2004）「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案―談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目―』『世界の日本語教育』14 pp. 75-91

船津衛（2007）「自我とコミュニケーション―多様性の向こう側―大橋理枝・根橋玲子（編）『コミュニケーション論序説』第2章、社団法人放送大学教育振興会 pp. 29-41

（お茶の水女子大学大学院）